

社会科における、資料を読み取り、自分の考えをもつための指導の工夫 —社会科学習ハンドブックを活用した実践例—

小西 英生

本研究では、どのようにすれば子どもたちが自分の思いや考えをもって主体的に学習を進めることができるかということに焦点を当てた。自分の思いや考えをもち主体的に学習を進めるためには、資料を読み取る能力を育成すること、言語活動を充実させること、問題解決的な学習を充実させることの3点が重要であると考え、そのための手だてとして社会科学習ハンドブックを開発した。そして、地図・グラフ・写真などの各種資料を読み取るための視点や、調べ方、まとめ方を社会科学習ハンドブックに提示し、その中から子どもたちが自分で方法を選んで主体的に追究活動ができるようにしたいと考えた。

第1章 社会科の現状とこれからの社会科学習

第1節 社会科学習における現状

近年の諸調査の結果から、複数の資料を読み取ることや、自分の考えをまとめて説明することに課題があることが指摘されている。そして、分析結果を基にした指導改善の方向が示され、資料を読み取ったり調べたりしたことを関連づけて考察し、自分の考えを表現する力を育成することが求められている。

また、新しく改訂された学習指導要領では、社会的事象の意味や働きを多面的・多角的に考えることや、社会的な見方や考え方を育むことが一層求められており、そのために、基礎的・基本的な知識・技能を習得することや社会的事象の意味や関連を説明するなどの言語活動を重視している。

また、先行研究からは、資料を読み取る能力を段階を踏んで育成することや、読み取ったことから考えを書いたり話したりする時間を設定することが重要であると報告されている。また、集団で思考する場を設定することや、資料を言語化する活動を取り入れることが、知識を獲得するために有効であるという報告もされている。

第2節 社会科学習に求められるもの

これらの現状を踏まえ、次の授業改善の視点が必要であると考えた。

まず、多様な資料の中から問題を見出す力や、問題解決のために必要な資料を収集したり読み取ったりする資料活用能力を高めることである。

次に、自分の思いや考えを広げたり深めたりするために、思いや考えを文字にして書き表したり、話し合ったりする活動を取り入れることである。

最後に、子ども自らが追究したい問題を見つけ、体験的な学習や調査活動を通して、自らの問題を解決していく学習活動を行うことである。

第2章 自ら問題を追究するための方策

第1節 社会科学習をより充実させるために

社会科学習の現状や授業改善の視点から、次の3点が重要であると考え研究を進めた。

一つめは、資料を読み取る能力を育成することである。そのために、資料を読み取る視点を提示し、その視点に沿って読み取っていく活動をすることで、各種の資料から情報を数多く取り出せると考えた。

二つめは、言語活動の充実である。そのためには、一つ一つの情報を文字にして丁寧に書き表す活動や、書いたことを基にして話し合う活動を数多く授業に取り入れることである。また、調べたことや考えたことを書きまとめられるようにするために、まとめ方の具体例を提示し、その中から自分の追究する問題や興味・関心に応じて選び、自分でまとめられるようにしたいと考えた。

三つめは、問題解決的な学習の過程における学習の進め方を子どもたちが身につけ、自ら学習を進められるようにすることが大切だと考えた。

第2節 学習ハンドブックを活用した

社会科学習

子どもたちが、どのように社会科の学習を進めていったらよいか分かるように、さらには課題解決に向けて自分の思いや考えをもって学習を進められるようにするために、学習ハンドブックを開発した。

<「出会う」過程>資料を読み取る視点を提示

<「つかむ」過程>学習問題の文型を提示

<「調べる」過程>調べ方の具体例を提示

<「まとめる」過程>まとめ方の具体例を提示

学習ハンドブックは、問題解決的な学習の過程に沿って構成されている。そして、小学校第3学年で、それを活用した授業実践を行った。

第3章 授業実践での様子

第1節 「京都市のまちの様子」での実践

「出会う」過程

自分たちが住んでいる京都市の地形や土地利用などの特徴をとらえられるようにするために、京都市のまちの様子がわかる写真を、視点に沿って読み取る活動をした。

「つかむ」過程

次に、写真から読み取ったことや疑問に思ったこと、また、京都市のまちの様子で自分が知っていることなどを交流した。交流の最後には自分が疑問に思ったことや調べたいことを出し合った。

そして、疑問に思ったことから、どのようなことを調べていくのか、学習問題の文型を参考にしながら調べるめあてをつくる活動を行った。

表1 学習問題の文型

様子や仕組みについて知りたいとき	～はどのようにになっているのだろう。 どんな～だろう。 どんな～をしているのだろう。 どのくらい～しているのだろう。 どんな工夫をしているのだろう。
わけや理由が知りたいとき	どうして～だろう。 なぜ～だろう。

児童は、「京都市の南の方の様子はどうなっているのだろう。」「山に囲まれたところはどんな様子だろう。」など、自分のめあてをつくることができた。

「調べる」・「まとめる」過程

調べ学習では、いくつかの調べる方法を具体的に提示することで、その中から自分で方法を選んで追究活動ができるようにした。

そして、調べたことや考えたことを交流し、京都市のまちの様子を白地図にまとめた。その際には、まとめ方の具体例を提示した。そのことにより、調べたことや考えたことを自分で工夫しながらまとめることができた。



図1 まとめ方の具体例

第2節 「商店のはたらき」での実践

「出会う」・「つかむ」過程

私たちがどこで、どのようなものを買っているのか、買い物調べの結果から思ったことや気づいたこと、疑問などを出し合い学習問題をつくった。この実践では、子ども自らが学習問題をつくれるようにしたいと考え、学習問題の文型に加え、学習問題をつくる道筋を示した具体例を提示した。

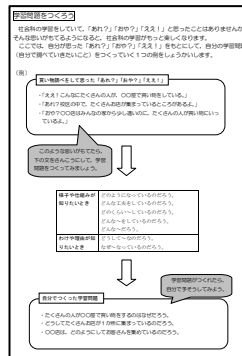


図2 学習問題をつくる道筋を示した具体例

買い物調べの結果から、A店とB店の二つの店に多くの人が買い物に行っていることに驚き、学級全体の学習問題を「なぜA店やB店で買い物をする人が多いのだろう。」にした。

さらには、なぜ多くの方がA店とB店で買い物をするのかを予想し、A店とB店に見学に行った。

「調べる」・「まとめる」過程

見学では、店の人や客にインタビューしたり店内の様子を観察したりしながら、自分がたてた予想を確かめていた。

見学の後は、集めた情報を基にして予想を検証した。そして、見学に行つてわかったことや考えたことをグループでまとめ発表した。発表し合う際には、A店とB店の品物の値段や工夫などが比べられるようなワークシートを作り、メモするようにした。そして、なぜA店やB店で買い物をする人が多いのかを話し合った。児童は、メモの内容を見ながらA店とB店の品物の値段や工夫などを比べていた。その結果、「A店やB店は、ねびきやサービスが多いし、それぞれにすごく工夫しているから多くの方が買い物をすると思いました。」などの考えをもつことができた。



図3 まとめ発表

第4章 研究の成果と課題

第1節 研究の視点について

「出会う」過程においては、資料を読み取る視点を提示し、それに沿って読み取っていく活動をすることで、子どもたちから「何だろう。」「～かな。」という疑問が多く出された。その疑問が学習問題へとつながっていった。

一つ一つの情報を文字にして丁寧に書き出すことで、その内容が考える材料になった。また、書いたことを基にして話し合う活動をすることで、自分の思いや考えが確かなものになった。

問題解決的な学習の過程で授業を進めることで、子どもたちに「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」という一連の流れが少しずつ意識できるようになった。

このように、学習ハンドブックを繰り返し活用しながら学習を進めることで、問題解決的な学習の進め方を身につけることができると考える。